東京･羽田イノベーションシティ本格稼働　先端技術集積

News 潜望展望

#東京 #関東 #ネット・IT

2022/8/23 2:00 [有料会員限定]

多くの来街者で活気づく羽田イノベーションシティ（8月上旬、東京都大田区）

羽田空港の旧施設跡地に2020年7月オープンした研究開発と飲食店などの複合エリア「羽田イノベーションシティ」（HIシティ、東京・大田）が活気づいてきた。新型コロナウイルス禍で苦しい走り出しを余儀なくされたが、最新技術を有する企業が徐々に入居。最先端のテクノロジーを体感できる拠点として軌道に乗り始めた。

川崎重工が羽田イノベーションシティ内に出店したレストランでは、最先端のロボットが配膳や調理を担う（8月上旬、東京都大田区）

「料理をお出しします。テーブルの上を片付けて、お待ちください」。8月上旬、HIシティ内のレストランで料理を注文した客に話しかけたのは、モニターが顔になったロボットだ。トレーをつかむアームを備え、厨房から客が座るテーブルまで、料理をスムーズに配膳した。調理も別のロボットが担当した。

レストランは22年4月、川崎重工業が出店。ロボット業界の関係者や一般客ら、7月末までに予想を上回る2千人以上が来店した。接客を受けた来店者の意見を参考にしながらロボットの動作を改善していく。開発を進める川重とベンチャー企業は、店舗に隣接した「ラボ」で共同研究に日々取り組んでいる。

HIシティには企業の研究開発拠点やコンベンション施設、ホテル、ライブ会場などが立ち並ぶ。羽田空港が沖合に移転した際に生まれた跡地約5.9ヘクタールのエリアに立地し、鹿島など9社でつくる特別目的会社（SPC）「羽田みらい開発」が開発と運営を担う。

大田区から50年間の契約で土地を借り、企業同士の活発な交流を通したイノベーションの実現などを目指して事業を展開している。京浜急行電鉄と東京モノレールの天空橋駅に直結し、空の玄関口に隣接する国内外へのアクセスの良さや、ものづくりを得意とする中小企業が集積する強みを前面に企業誘致を進めてきた。

例えば、大田区が運営する企業交流拠点「ハネダピオ」が入る建物にも、新事業の創出に意欲のある企業などの入居が続き、現在では約8割の区画が埋まっている。開業時はほぼ空だった。

行き交う一般の人の数も増加傾向だ。区の分析によると、22年3月の1カ月間の訪問者数は21年4月の2倍以上になった。大規模なホールを備える「Zepp Haneda」は、開業当初はライブを無観客で開催するなどしていたが、最近では開演に合わせて多くの観客が会場周辺に列を作る光景が見られる。

羽田みらい開発の統括責任者を務める鹿島の加藤篤史氏は「イベントの開催などでこの街が認知される機会が増え、訪れる人が徐々に増えてきている」と実感する。

羽田イノベーションシティでは先端医療研究センターなどの建設も進んでいる（8月上旬、東京都大田区）

HIシティの開発は今も続いている。23年夏には先端医療研究センターなど3棟が新たに竣工する予定だ。同センターには、藤田医科大学病院を運営する藤田学園（愛知県豊明市）が入居する。3棟の延べ床面積は計7万3千平方メートルで、竣工によりHIシティは現在の約2倍に規模を拡大し、23年秋ごろグランドオープンを迎える。

多摩川の対岸にはライフサイエンス系の研究機関が集まる川崎市殿町地区（キングスカイフロント）があり、22年3月の多摩川スカイブリッジ開通でアクセスが格段に向上した。大田区の地元企業のほか、殿町地区とHIシティの連携の可能性も広がった。

ハード面の整備が進むなか、期待が高まるのは、企業や組織の垣根を越えて知識や技術を持ち寄る「オープンイノベーション」の実現や新たなビジネスの創造だ。

HIシティは、国際線が発着する羽田空港第3ターミナルと近接している。成長分野の企業を誘致するとともに、国際線が就航する都市などと交流を活発化させ、具体的な成果を生み出していくことが求められる。ビジネスのマッチングを促進するためには、地元企業の情報を多く持つ行政の役割も大きい。

海外との人の往来が本格化した際に、ビジネスや観光目的の訪日客らを呼び込み、街や周辺地域の活性化につなげられるかも問われる。気軽に立ち寄るための交通システムの構築や、経済波及効果を高めるための戦略が重要となりそうだ。（相松孝暢）